

JICA シニアボランティア

千葉

SVニュース千葉 第21号

2014年9月14日発行

千葉県JICAシニアボランティアの会
mytsuda_0518@yahoo.co.jp

本号目次

講演要旨: 「JICA東京における 自治体(千葉県)と の地域連携」	2
通常総会報告 会長挨拶	3
26年度重点活動	4-5
帰国報告会実施	5
出前講座報告	6-7
任国事情	8-11
会員随想	11
お知らせ他	12

第18回公開講演会と弊会通常総会開催

去る5月10日午後、千葉市国際交流プラザにて、JICA東京国際センター 佐藤俊也 地域連携課長による「JICA東京における自治体（千葉県）との地域連携」と題する講演が行われ、引き続き弊会の平成26年度通常総会が開催されました。

当日は五月晴れとなり、午後1時30分からの公開講演会には会員、一般来場者約50名が参加し、津田会長および来賓挨拶に続いて、JICA東京センター地域連絡課 佐藤俊也課長による「JICA東京における自治体（千葉県）との地域連携」と題する講演が45分間にわたり行われました。

佐藤氏は日本のODAが担う国際貢献の役割をどう展開するかについて触れられ、さらに自身が勤務したパキスタンでの実例や千葉県におけるJICA事業についても紹介されました。佐藤氏の講演要旨は本紙第2面に掲載しています。

続いて2時40分から当会の通常総会が、有効出席者64名（うち委任状は29名）で開催されました。酒井國彦事務局長による昨年度の一般



事業報告、羽田 亨 副会長による開発教育推進事業の説明などのあと、昨年度の会計報告、今年度の活動計画など、計7議案が付議され、質疑応答のあと、全て承認されました。4時45分、羽田副会長が閉会の挨拶で締め括り、その後、「美弥和」にて懇親会が開催され、会員は旧交を温めました。



特別寄稿「平和国家・日本の礎」 JICA東京国際センター 所長 佐々木 十一郎



千葉県民の皆様、千葉県JICAシニアボランティアの会の皆様、はじめまして。

JICA東京所長としてメッセージをお伝えすることができ光栄に存じます。まず貴会の実施報告を拝見し、その大変活発な活動に大いに勇気づけられました。特に出前講座、平成18年度から継続し、昨年度35件の実績はすばらしい。ボランティアの皆さんの協力活動は途上国が本番の舞台ですが、帰国後もその経験を活かし、国際協力や異文化理解の啓発活動を継続されている姿勢に敬意を表します。昨今、地方創生、地域の国際化、グローバル人材育成といった言葉をよく耳にしますが、皆さんの活動はまさにこれの下支えするものだと思います。

現在、千葉県の派遣中のシニア海外ボランティア、日系社会シニア・海外ボランティアの方は20名、帰国済みは364名です。6月25日には平成26年度第1次隊



出発ボランティア25名と帰国者5名が千葉県庁を表敬し、諸橋省明副知事から「海外で得た貴重な経験を国内外で活かしてほしい」との激励をいただきました。これらのボランティアの中には、皆さんの出前講座に触発された方も少なくないと思います。人生の転機は自らが選択して切り開いてゆくものですが、そのきっかけは「思わぬ縁」にあるのではないのでしょうか。

中学生時代に聞いたこともない外国で

奮闘した日本人の話、大学の卒業旅行で迷い込んだスラム街の風景、車内吊りポスターの子供の笑顔に惹きつけられて参加した募集説明会などなど。

さまざまな情報が氾濫し、どこにいても簡単に知りたいことがわかる世の中。しかし、だからこそ本当に自分が求めるものが何なのかを見失いがちな世の中ではないでしょうか。

JICAの関係者としては日本の環境とかけ離れた開発途上国で、そこに住む生身の人々と苦楽を共にし、人生ドラマを味わった皆さんの「経験」を開発事業に活かすとともに、その価値のある情報を発信し続けていきたいと思っています。地味な活動であるかもしれませんが、そのことが信頼され強い平和国家・日本を育てていくことに繋がるものだと思っています。引き続き、皆さまのご協力をお願い申し上げます。

公開講演会講演要旨

JICA東京における自治体（千葉県）との地域連携

独立行政法人 国際協力機構（JICA）

東京国際センター地域連携課 課長 佐藤 俊也



国際協力機構（JICA）は、国際協力機構法に基づき設立され、ODA（Official Development Assistance＝政府開発援助）を一元的に実行する独立行政法人で、1974年に設立された国際協力事業団（旧JICA）がその前身となっております。

ODAの支出額については、1990年代においては、日本は先進国の中でトップの位置を占めておりましたが、現在では第5位にまで落ち込んでおります。（現在のトップは、9・11事件が発生した2001年以降のアメリカです）。また、国民一人当たりの額に換算すると、18位となっております。なお、トップはノルウェーです。

<JICAが実施する事業>

JICAにはODAを実施していく上で大まかに5つの形態（スキームと呼んでいます）があります。その5つとは、技術協力、無償資金協力、有償資金協力、市民参加協力、国際緊急援助です。

（1）技術協力は、主に①専門家派遣、②研修員受入、③機材供与の三つを組み合わせ、発展途上国の課題解決に向けての人材育成、研究開発、技術普及、制度構築等を支援します。

（2）無償資金協力は、資金の返済を求めない資金協力で、主として病院、学校、道路等のインフラ整備にかかる施設の建設や、医療・教育関係機材の調達にその資金は使用されます。

（3）有償資金協力は、無償資金協力とは異なり、資金の返済を求めるものですが、これらの資金は無償資金協力と同様に、途上国のインフラ整備等に使用されます。無償資金協力は有償資金協力と比較して提供する金額が低く（一般的に総額50億円程度が上限）、有償資金協力はそれ以上の資金提供となります（例外もあります）。

（4）市民参加協力事業は、①開発教育支援、②草の根技術協力、③ボランティア、の三つに分かれます。①開発教育支援は主として学校現場で実施される国際理解教育を、出前講座、エッセイコンテスト等のメニューを実施しながら支援します。②草の根技術協力は自治体やNGOが途上国で協力活動や支援を行います。③ボランティアは皆さんご存知のとおり、青年海外協力隊、シニア海外ボランティア等の派遣を行っております。

（5）国際緊急援助は、途上国で大規模な災害が発生した際、主として①救助チーム（レスキュー隊）、②医療チーム（医療関係者）の派遣で、被災地に対する迅速な支援を行います。

<日本がODAを実施する意義>

日本の財政が約1,000兆円の累積赤字で逼迫する中、日本がODAを実施する意義は何なのでしょう？大まかに言って三つの意義があります。

それは、（1）国際貢献を果たす上での非常に有効な外交手段、（2）途上国の発展・安定は日本の国益にも適うもの、（3）日本の存在感・知恵・技術の途上国へ普及・浸透、です。

もう少し具体的に申し上げますと、①日本は食料・エネルギーを途上国に依存しており、食料・エネルギーは日本の生命線の一つでもある、②途上国の環境の悪化は、日本にも影響を及ぼしている、③途上国の感染症・麻薬・テロ・紛争等は、日本の安全を脅かしている、④途上国の貧困問題の解決は、国際社会が取り組むべき課題である、⑤途上国の経済発展は、日本の経済発展に取ってもプラスになる、⑥国際貢献をすることは、国際社会での発言力が増大する、の六つがポイントであり、途上国を援助する事は、自国の利益にも繋がる事になりますので、ODAを実施している、と言う事になります。

<千葉県におけるJICA事業>

JICAは前述した「市民参加協力」において千葉県と連携しております。開発教育支援では2013年度は、出前講座は52校で実施、エッセイコンテストは中学校・高等学校から約3,800作品の応募がありました。

ボランティア事業では、現在までに千葉県出身の方で青年海外協力隊（日系社会青年ボランティアを含む）は1,572人、シニア海外ボランティア（日系社会シニア・海外ボランティアを含む）は364人の方が帰国されております。

自治体から提案された草の根技術協力は、過去6案件が実施され、現在『機械系技術技能教育の指導力向上プロジェクト（ベトナム）』を千葉県教育委員会が、『「道の駅」を基盤とした、農業の第6次産業化による地域振興（ベトナム）』を南房総市が、『ラオス・ヴィエンチャン都水環境改善事業（ラオス）』を千葉県総合企画部が各々実施中です。



草の根ラオスピエンチャン活動

これらの事業を通じて、自治体の国際協力の推進、途上国の発展、千葉県の活性化、が期待されております。

<終わりに>

千葉県JICAシニアボランティアの会の皆様には、ボランティアの出発前表敬へのご同行、各種イベントにおける連携等、いろいろとお世話になっております。今後も様々な連携を通じ、一般市民の方々への国際協力への理解推進にご協力を賜りたく、引き続きどうぞ宜しくお願い致します。

平成26年度通常総会を開催

5月10日（土）14:30～16:00、千葉市国際交流プラザ会議室において行われた第19回公開講演会に引き続き、弊会の平成26年度通常総会が開催されました。

司会の及川淳一副会長が、出席会員35名、委任状提出会員29名を確認、総会の成立条件を満たしているとの報告があり、開会の宣言を行いました。

津田正臣会長の挨拶に引き続き、JICA東京国際センター地域連携課課長 佐藤俊也氏、同国内協力員 小山由美氏、JICA千葉デスク国際協力推進員 和泉澤 浩氏、青年海外協力隊千葉OB会会長 浜田眞一氏の来賓の方々からご挨拶を頂きました。

規約に従い、津田正臣会長が議長をつとめ、村田淑子、鈴木伸一両会員を書記に選出後、以下の7議案が上程され、それぞれ原案どおり可決されました。

第1号議案 平成25年度活動報告

第2号議案 同 会計報告

第3号議案 同 会計監査報告

第4号議案 平成26年度活動計画案

第5号議案 同 予算案

第6号議案 当会規約改定案（第5条 役員数の改定）

第7号議案 同 役員人事案

従来、活動報告、会計報告が各年度の通常総会の開催日翌日を起点としておりましたが、今年度より会計年度の4月1日から翌年3月31日迄を各年度の活動として報告することになりました。

第6号議案で幹事一名の増員をするため、規約の変更を付議、承認を求めました。目的は国際理解教育の推進など業務の増加への対応です。

引き続き行われた役員人事では、新役員として、村田淑子、鈴木伸一両会員の2名を新幹事として迎え、大久保邦衛氏の勇退と、再任役員として津田正臣、及川淳一、羽田 亨、酒井國彦、大西輝明、白鳥貞夫、坂出直哉、加藤哲男の役員1名の増員を含む人事が承認されました。詳細は下表をご覧ください。

通常総会終了後、レストラン「美弥和」において懇親会が開催され、相互の情報交換が行われました。

平成26年度通常総会に際して

会長 津田正臣



会員の皆様、通常総会にご出席有難うございます。またご来賓の皆様、ご臨席いただき厚く御礼申し上げます。

当会は、昨年創立10周年を迎え、盛大に10周年記念行事を開催することができました。

これらは会員の皆様を始め、JICA、千葉県、その他関係各所の皆様方のご協力・ご支援によるものと深く感謝いたしております。

当会の活動の理念は、海外ボランティア経験を生かした「地域社会への還元と貢献」であります。これらを踏まえた25年度の運営結果のご報告と26年度の運営方針について、後ほどご審議いただきたくと考えております。

その運営につきましても、当会のモットーでもあります「会員相互の親睦を図り」「無理せず」「楽しく」進めていきたいと思っております。

このような当会の運営資金はJICA支援経費、会費、および寄付金で支えられており、特に会員の方からの出前講座謝金からの寄付に対し、この場を借りて重ねて御礼申し上げます。最後になりますが、ご来賓の皆様方の日頃のご支援に感謝申し上げますと共に、今後とも当会の活動に一層のご鞭撻を賜りますようお願いいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。 ありがとうございます。

平成二十六年役員人事

五月十日に開催された通常総会において、平成二十六年役員として次の諸氏を選出されました。

会長	津田正臣	千葉県
副会長	及川淳一	船橋市
副会長	羽田 亨	柏市
事務局長	酒井國彦	千葉市
幹事	大西輝明	浦安市
幹事	白鳥貞夫	柏市
幹事	坂出直哉	千葉市
会計監査	加藤哲男	流山市
幹事	村田淑子	船橋市
幹事	鈴木伸一	市川市
顧問人事(参考)	大久保邦衛	浦安市
〈再任〉	山本茂穂	千葉市
〈退任〉	品川洋之助	鎌ヶ谷市

平成26年度重点活動について

当会の活動理念は、シニア海外ボランティアとして、これまで培ってきた知識・経験を生かした「地域社会への還元と貢献」です。これをふまえ、26年度総会で活動計画と3つの重点活動事項が承認されました。その背景とその活動にかかわる具体的施策は以下のとおりです。

I 「新会員の増加」と「会報電子版の活性化」について

当会では、会員の皆様のご承知の通り、通常総会と公開講演会、定例会と公開講演会および年2回の帰国報告会等の4大行事、出前講座の実施、国際交流イベントへの参加、SVニュースの発行、ホームページの開設等を行っております。

特に4大行事につきましては、会員の皆様へ会報電子版により直接、ご出席のご案内をさしあげておりますが、会員の方々の参加状況を見てみますと、事業内容にもよるかと思いますが、この数年、少しづつではありますが減少しつつあります。

また、当会の会員数の推移を見てみますと、会発足の2003年より2009年位までは順次増加してまいりましたが、以降ほぼ横ばいか、やや減少となっております。これら減少の要因としては、会員の高齢化や、当会事業への関心の希薄化等が考えられます。前者については不可避な要素が大きく、後者につきましては、会の運営を預かるものとしては、魅力ある会事業の運営が不可欠だと認識しております。

当会がこれからも存在感のあるOB会として存続しつづけるため、会員の減少を食い止め、また会員に対し、会事業への関心を持

たせることが不可欠だと考えております。

これらのため、当面、下記のごとき具体的施策を早急に行って行きたいと考えています。

新会員の増加

①JICA帰国者情報の活用：入手し、新帰国SVに入会を働きかける

②県庁表敬訪問情報：派遣、帰国SVに入会を勧奨する

これらは従来より適宜行われておりましたが、組織的に、より堅実に実行してまいります。

③Websiteの活用：会員募集欄、入会案内欄等を設置

④その他：将来的ではありますが、賛助会員制度の検討

会報電子版の活用

会員への従来の4大事業の発信に加え、

①当会が参加する国際交流イベントの案内

②出前講座関係情報の発信、講師募集、講師研修案内等

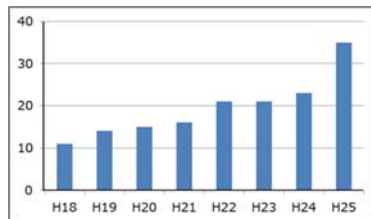
③JICA、JOCA、千葉県等からの重要情報の伝達

などの具体的施策を実行してまいります。また、会員の皆様からも施策のご提案があればともっております。

(会長 津田正臣)

II 「国際理解教育」の意義と課題について

「国際理解教育」は、H18年に開始以来150を超える出前講座、大学連携授業を実施してきました。出前講座・大学連携授業数は順調に増加、継続の依頼も増加し、一定の評価を得るようになりました(図参照)。



国際理解教育を行う目的は次の4点にあります

①シニアのライフモデルとしての海外ボランティアの体験を伝える、
②ODA、国際協力の一員として行った現場活動を伝える(公的活動結果の社会還元)、
③JICAボランティア参加への啓発と将来の会員確保(JICAへのサポート及び会員増強)、
④質の良い講座を提供することにより会のステータスを向上

さらなる充実のための課題は何か

①実施講座数の安定化。H25年度に年間20件の壁を超えたが、更に安定的に伸ばす具体的方策、
②登録講師35名、応募者10名前後に固定化している現状を打破する方策

課題の改善策は何か

平凡ですが、次の諸策を地道に実行してゆく事につきますでしょう。

①当会の出前講座の存在を千葉県内で広く知ってもらう(地道

な広報活動、会員全員による口コミ活動、チンドン屋作戦)、
②依頼者が求める講座づくりに努力する(依頼者への提案と要望の調整、講師選び)、
③講師登録を推進する(新規帰国者等未登録会員への登録案内とスキルアップ講座の実施)

結論：次の具体的目標に向けて活動する

1. 2014年度～2017年度の中期目標として新規10件を開拓

①一般出前講座：新たな依頼者開発(千葉市へのアプローチ等)、
②小中学校出前授業：船橋市、千葉市での実績を更に拡大、
③大学連携授業：グローバル化教育重点校を開拓

2. 良質な講座の提供

①リピート100%の確保を目標として、依頼先との十分な事前の意見調整・実施を原則とする、
②講座結果の検証：アンケート実施、講師へのフィードバック方法の確立、
③講師登録機会の増加：会報電子版による2回/年の実施、会員の50%登録、
④講師への「スキルアップ講座」の実施：JICA地球ひろばによるセミナーの招へい(通常総会、定例会のイベントとして)、
⑤講師への処遇方法の定型化：謝金、交通費等無理のない対処。

当会の活動の基本理念である「会員が無理なく参加できる」事を念頭におきつつ、これからも「国際理解教育」の推進に努めてまいります。会員の皆様の積極的なご参加をお願いいたします。

(国際理解教育推進担当 副会長 羽田 亨)

Ⅲ SVニュースの横組み化のねらいと期するもの

当会の広報紙「SVニュース JICAシニアボランティア千葉」が発刊されて10年が経過しました。2004年3月発行のSVニュース第1号は縦組右開きの8ページ、ここ数年は1、2面にJICAや当会と関係ある官公関係者の寄稿や講演会の模様、3面以降にSV活動関連記事が続く縦組み12ページの構成で発行されました。SVニュースが今や2000部発行となったという事実は、こうした制作方針が正しかったことを示すものと言えましょう。

過去10年のSV会は、その形を整え、守りを固め、方向性とあり方を決めた、大げさに言えば理念を構築してきた時期であったと言えます。こうした時間が組織の成長のために必須であることは否めません。しかし、会結成後10年を経て会の「かたち」が出来上がったいま、まさに次の発展の段階、「次の10年」に意識を転回し、挑戦すべき時でありましょう。その一つのあらわれが「横組みSVニュース」への脱皮です。

印刷物の縦組みと横組みとを比較する場合、縦＝古い、老人的、日本的、Internal、閉鎖的、利己的、そして、なにやらまじめ

で硬そう、などを連想させ、横＝新しい、若者的、国際的、External、開放的、利他的、なにやら親密そう、などを思い浮かべます。こうした印象の違いに関して、皆様はどうお思いでしょうか。

「次の10年」が、「我々のSV会」からシニアボランティアの精神に則って外に目を向けた「社会のためのSV会」へ、発行者目線のSVニュースから読む側の目線に立ったSVニュースへの転換を目指すそうするとき、externalでopenな印象の機関紙を発行することは、いかに重要なことでありましょうか。そうした手立てのひとつが、横組みSVニュースです。こうした「変身」によって、従来は会員を対象としたSVニュースが広く人々の間に広がって読まれ、われわれSVの存在や活動がより一層、社会的に認知されることになれば、こんなに意義のあることはありません。SVニュースの横組みは、今後も継続する構成やスタイルの見直しを通して、SVニュースにbreakthroughをもたらす基盤になりましょう。

さらに、横組みでは数字や英単語が（縦組みに比べて）実にきれいで読みやすいという美学的かつ実利的な利点があることも、当記事をご覧になればご理解いただけることでしょう。

（広報担当幹事 大西輝明）

第17回帰国報告会開催

6月28日(土)午後、浦安市国際センターにて、当会主催の第17回帰国報告会がJICA東京国際センター、浦安市国際センターの共催、千葉県、浦安市の後援で開催されました。一般聴講者も含めて参加者約60名を迎え盛会でした。



報告者 左より山崎 清、高木利公、濱崎 丘、児玉東洋の各氏

「教学相長」ドミニカ共和国での活動 児玉 東洋 氏

任務の工業廃水処理指導では「ないないづくし」の環境の中で、水処理の接触材にペットボトルを使うなど現地の資源と技術で「出来ることをやる」ことに注力した。担当者には知っておくべき最小限の知識をまとめたハンドブックを作成、経営者に対しては環境意識と社会的責任についても重要性を喚起した。

「教学相長」の出典は「礼記」、意味は「人に教えることと、人から学ぶことは、互いに作用し合う」という活動を実践した。

カリブの国、ベリーズ

濱崎 丘 氏

中央アメリカの小国で廃棄物処理に係る全体計画の立案と実施指導にあたった。従来は、集積・放置された廃棄物を不法入国者がゴミ漁りする非衛生的な状態だったが、米州開発銀行から

14億円の借款を得、新技術による廃棄物収集から「福岡方式」による最終処分に至るトータルシステムを構築することになり、パイロットプランの建設と稼働開始に注力した。

また、JOCVと連携し環境教育、リサイクル運動などを通じて、現地の人々との交流を深め、充実した2年間を過ごした。

ヤンゴンのパソコン教室でも白シャツにロンジーが制服

高木 利公 氏

ミャンマー情報通信技術研修センターに6か月間の短期派遣で、最新技術の講義を行った。人々の熱い人情に囲まれて充実した活動の日々を過ごすことができた。

鎖国が解かれ、急速に近代化が進んでいるが、学校では男女学生だけでなく講師も白シャツに緑のロンジー（巻きスカート）の着用が必須である。タクシーの乗り方や通貨の端数処理、先生と生徒のプレゼント交換の習慣など、異文化を学習した。

コスタリカの農業試験場にて

山崎 清氏

カリブ・南米13か国とスペインが運営する国際農業機関CATIE（熱帯農業研究・高等教育センター）で熱帯果樹の研究を指導した。この機関は熱帯アメリカで競争力のある持続可能な農業と自然資源の管理の確立、貧困の減少を目的としている。ここで遺伝資源の保存・増強と特性調査、利用を担当した。

活動の2年目は遺伝資源のカタログ作成、3年目はサボテという植物の特性調査にあたり、講習会も開催した。コスタリカは政治が安定しており、恵まれた環境の中で充実した研究ができた。

出前講座実施報告（2014年4月～2014年7月）

国際理解教育促進のため弊会が出前講座を開始して9年目になります。今期は公民館・大学へ4件の出前講座のほか、弊会主催の自主講座も実施されました。概要は以下の報告をご覧ください。講座開催を企画しておられる皆様には、ぜひ弊会の国際理解教育出前講座をご利用下さいますようご案内いたします。詳細は当ページ下部欄外に記載のURLで弊会ホームページをご覧ください。

公民館への出前講座

「微笑みの国タイ」寺田 博義会員 於：八千代市総合生涯学習プラザ（2014年7月27日）

7月27日、標記学習プラザにおいて、平成26年度市民カレッジ「国際ボランティアから見た世界の国々」で寺田博義会員による「微笑みの国タイ」と題する講演が、午前10時から1時間半にわたり行われました。40名の熟年の出席者に対し、環境問題、生産工学の専門家としてのボランティアを志した動機、現地活動の実際、人々の生活の様子とタイで学んだことなどを紹介しました。講師はタイでの生活から知り得た日本との違い、国王崇拝と仏教との関係などの、日本人の想像を超えた事柄などについて多くの写真で紹介しました。日本人が忘れかけている「微笑み」をタイの人々から教えられたことや、異なる宗教や異文化の理解は、まずそれを無条件に受け入れることから始まることなどの話で、参加者から大変有益な話であったとのコメントがありました。＝写真1



1

放送大学への出前講義

「ベトナムの裾野産業振興」施井 仁祥会員 於：放送大学千葉学習センター（2014年4月27日）

4月27日午後2時10分から1時間25分にわたり、施井仁祥会員による教養学部春季面接授業「国際協力 現場からの視点 アジア編：ベトナムの裾野産業振興」と題する講義が女性4名を含む30～60歳の生徒15名を対象に実施されました。現職時の海外勤務経験を活かすために海外ボランティアを志したことが動機であると説明し、ベトナムでの裾野産業の現状とその振興の必要性、振興の目標設定、そのための支援プロセスなどを順を追って説明、中国とベトナムの発展過程の違いなども自身の経験をふまえて話しました。また、想定外の問題発生、現地習慣や国民性の違いによる技術移転上の苦労話、活動しての反省点や成功、失敗例など盛りだくさんの講義で、学生から熱心な質問が寄せられました。＝写真2



2

麗澤大学との連携授業

「フィールドから世界を学ぼう」

濱崎 丘会員

於：麗澤大学外国語学部（2014年6月25日）

「ネパールでの生活と活動から学んだこと」

和田 素賀子会員

於： 同上 （2014年7月9日）

6月25日午前、麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻の1年生35名の基礎演習「フィールドから世界を学ぼう」で、濱崎 丘会員が講義を行いました。

授業の前半では海外ボランティアの目的、自身の4か国でのボランティア体験を紹介し、この中で、職業経験とは異なる環境NGO

での自己研鑽によってシニアボランティアへの道を開いた経験を語りました。後半では、各任国での生活・習慣のギャップ克服をテーマに、言語、宗教、食など例を挙げ、それぞれにどう対処するかについて学生の意見を求めました。講義の最後にはヨルダンにおけるJICAボランティアの映像を上映し、国際協力との取り組み方や講

師の期待を述べて締めくくりました。＝写真3

かわって、7月9日午前の講義は和田 素賀子会員によって行われました。講義内容はネパールの基礎情報、遺産や文化、環境と生活の実態、味わったカルチャーショック、日本語教師シニア海外ボランティアとしてのさまざまな活動や体験、青年海外協力隊員を志す人々への期待などから構成され、学生との間で「謝る」習慣の

ないネパール国民にどう対応するかなどに関する議論も行われました。さらに、自身の殻に閉じこもることなく積極的にコミュニケーションを行うことの重要性や、不便なことであってもそれを受容することの大切さについても話をしました。学生からは謝ることのない国民性に対する驚きの感想や、多くの活発な質問が寄せられました。

＝写真4



柏ビレジIVY-LABO 弊会主催出前講座「世界でシニアボランティア」

「バヌアツ共和国：世界一幸福な国の実像は？」 白鳥 貞夫会員 於：柏ビレジIVY-LABO（2014年6月20日）
「シリア：あんなに平和な国だったのに……」 加藤 哲男会員 （同上）

柏市北部の柏ビレジは80年代に開発された1600戸の大型住宅団地で、住民の高齢化に伴う様々な課題に対処する試みが東京大学大学院の新領域創成科学研究プロジェクトとして進められています。その一つとして、住民の交流と地域活動を活性化する場として団地内商店街の空き店舗を活用してIVY-LABOが開設されました。

そこでの試行イベント募集に対して弊会主催による出前講座の提案が採用され、その第1回目が6月20日午前、2時間にわたって開催されました。＝写真5

前半は白鳥会員が、原始集落での自給自足の生活習慣が強く残る国でのビジネス研修事業の立ち上げという特異な体験を紹介しました。

英国のシンクタンクが発表した世界幸福度調査でバヌアツを第一位にランクした意味を掘り下げ、経済発展と情報過多がもたらしている先進国の社会の歪みや、日本人の人生満足度が低いことについての認識を喚起しました。

後半は加藤会員が、日本の社会通念が通用しない中東の伝統文化や生活習慣が強く残る国で食品の化学分析技術を教えた体験を紹介しました。

治安の心配もなく平和な国だったシリアが、アラブ民主化の波での平和的デモを契機に、一転して内戦状態に陥ったこと、加藤会員が目をかけていた有能な青年達も潜伏を余儀なくされ、国外に避難していることなどを生々しく伝えました。＝写真6

アンケートでは、「興味を持って、今後も参加したい」などの意見が



寄せられました。今夏は小中学生のための自主出前講座も開催する予定です。

任 国 事 情 再派遣中の会員・帰国した会員のホットな現地情報です



ケニア

ナイロビのスラム

鈴木 伸一

職種：コンピュータ技術 2010年3月～2012年3月

ケニアのナイロビ市にはアフリカでも有数の大きさのキベラ・スラムがあります。ケニア政府は7万5千人が住んでいると公表していますが、NGOなどでは30万人とも100万人とも言います。人口統計局の話では捕捉率が2割くらいしかない可能性があるとのことですが、他にも大小いくつものスラムが市内にあります。ナイロビ市の人口は400万人弱です。

スラム地域に住む人たちは多様です。地方や外国からの難民や犯罪者などだけでなく、大学の教授などや国家公務員も住んでいます。だから、自家用車を保有している人もいれば今日食べるものもない人もいるというのが現状です。つまり「勝手に建てられたバラックが軒を連ねる最貧困層が住む町」はスラムの中核地域については正しいが、地域の周辺に関しては正しいとは言えません。

多くが河原や池などの周辺で、所有者が国とかあるいは不明の土地などを不法占拠してバラックを建て始めたのがスラムの起源でしょう。その地に先住した家主から家を借りるとおよそ月額1000ケニア・シリング（Ksh：「シル」と略称：1Ksh＝約1円）だそうです。日本だと土盛した上に家を建てますが、逆に掘り下げるのに驚きました。屋根がその分低くなって作りやすいのかもしれませんが、でも雨が降ったらいつも床上浸水ですよ。

外からみれば、スラムは危険なところですよ。スラムに入るのに、お金や荷物は持たず、金目のものは身に着けるな、日没後は歩くと注意されました。住人によれば、特に危険なところと比較的安

なところがあるそうです。自動小銃を抱えた警官でも、犯罪者がスラムに逃げ込んだらそれ以上は追跡しないと聞きました。スラムの死因の第2位が暴力行為です。（死因の第1位はHIV/AIDSと結核）。立地条件から、蚊やハエが多く、クリーンな水も乏しいことから感染症が多く発生します。水道水がバケツ一杯（20リットル）で5Kshでした。トイレは共同で、有料（5Ksh）と無料がありました。風呂はありません。スラムの中には多様な商店に加えてNGOなどが運営する学校や医療施設なども場所によっては作られています。公立の診療所は20Kshから100Kshで診察・投薬を受けることができます。幅があるのは自治体からの補助金の割合によって決まるそうです。しかし、1日を100Kshで生活する人にとっては、よほどのことでないと医者にかかれません。

写真はミツンバ・スラムという小さなスラムで、2011年に政府の強制立ち退き執行により消滅しました。このとき、公務員の知人が「ホームレス」になってしまったとぼやいていました。

最後に、スラムの元気な子供達の目の輝きを忘れることができません。比較的裕福な家庭の子供達は大変おとなしく素直に思えたのですが、子供らしい、好奇心むき出しの腕白さが見られず、物足りなく残念に思っていたので特に感じたものと思います。



宗教の話題が大好きなケニアの人たち

田畑 成章

職種：経営管理 2013年7月～2014年5月

ケニアで最も驚いたのは、接触した人達のほとんどが宗教の話題が大好きなことでした。2010年から2年間SVとして過ごしたパラグアイも毎週教会に通う熱心なカトリック教徒が多いのですが、ここでは宗教を聞かれても取り敢えず仏教徒だと答えておけば、それ以上の追及は受けませんでした。でもケニアではそれで終わることはほとんどありません。

職場の車で出張した時などはドライバーがどんどん追及してきます。日本人にはキリスト教徒はいないの？仏教と神道はどういう関係？お寺や神社にはいつ行くの？仏教にカミ様がいないのはどうして？八百万のカミの中で一番偉いのはどのカミ様？世界と人間を創ったのは？ケニア（キクユ族）にも大樹のカミ様、山のカミ様、

色々あるけど創造主のカミ様もいて、それは結局ゴッドと同じだ。日本にもそういうカミ様がいるんじゃないの？このドライバーは聖書を車に常備していて、待ち時間にはたまにひも解いておりましたが、このような情景が珍しいとは言えないのがケニアです。

インド洋岸リゾートに休暇で滞在した際、日曜の朝いつもの掃除係の女性が、今日は教会に行くから掃除を友達に頼んでおいたと言います。えっと驚きましたが、平静を装い、教会に行くのがどうして好きなの？と聞いてみました。教会で歌って踊るのは本当に楽しいのよ、教会大好き。あなたはどのように行かないの？と逆に聞き返されました。

実はケニアに赴任して1か月目の日曜日、近所の教会を探訪してみたことがあります。9時ごろから人が集まり始め、10時ごろに満席。説教、祈り、歌、踊りを混ぜながら進行します。ああこれはかけがえのないエンターテインメントなんだと納得した私は途中で退席しましたが、これが午後にはわたり延々と続きます。

職場の同僚と話している時、あなたが教会に行かないのは真実に直面するのが怖いからじゃないの、と言われ、ああこれは新興宗教のノリだと思い至りました。そういえば、あの教会で見られる熱狂もそういなくありません。

なぜケニアの人達の多くが信仰熱心のみならず、宗教を話題にするのが大好きで、一部の人達は勧誘にも熱心なのか、これを滞在中に解明したいと思うようになり、次のような仮説を持つに至りました。事実誤認も含まれていると思いますので、話半分でお読みください。

彼らにとって歌踊り祈りが合体した伝統宗教は生活と一体のものであったが、80年間続いた植民地時代、キリスト教に改宗しなければ野蛮と見做され、教育もまともな職も得ることができなかった。改宗がもたらす伝統からの断絶とアイデンティティ喪失の危機を乗り切るには、キリスト教に歌踊りを合体させることが唯一の解。これによって救いを得た人たちは勧誘にも熱心。イスラム教徒やマサイのように伝統宗教を守ろうとする人たちも、防衛のために宗教論争に熱心にならざるを得ない（注）。



近所にあった教会。小さく見えるが数百名収容可能。ナイロビにはこのようなテント式教会が多数ある。

（注）ケニア政府サイトの宗教欄（<http://republicofkenya.org/culture/religion/>）を見るとキリスト教プロテスタント45%、同カトリック33%、イスラム教10%、伝統宗教10%、他2%。



チリ

シニアボランティア活動 中間振り返し

浦木 仁

職種：品質管理 2013年3月～ 派遣中

60歳定年になって始めた海外ボランティア活動の最初の2年間は、メキシコのケレタロ工科大学で日本式生産管理を教えたり、企業の改善指導を行いました。そして今回、その技術資料や経験を携えてチリに向かいました。チリは日本の2倍の国土に1/7の人口で、サンティアゴ首都圏に人口の約4割が集まっています。その中心から南へ30kmほど離れた近郊都市サンベルナルドの企業組合（AISB）に配属になりました。組合企業約40社、70%が中小企業で、金属加工業が40%と多く、その組合企業の法律・会計相談、生産管理や経営管理の支援が仕事です。近くに大きなショッピングモールがある近代的な都市で、生活面の不安はなく、私の住居であるマンションの12階からみるアンデスの山々が四季折々にとてもきれいです。

赴任直後、企業組合の経営者たちを集め、私に何ができるかを説明して企業訪問を始めました。同時に所属するAISB自体も日本式改善の発信基地としては不十分でしたので、改善教育を始めました。しかし、メキシコの時と異なり、今回は企業訪問をすべて原則単身で行わざるをえず、スペイン語での意思疎通力向上のために毎週月曜30分の時間をもらい、語学訓練と技術資料見直しを兼ねたAISB改善会議を始めたのです。そして6月、1年間41回の改善活動が終わり、有意義な拠点作りが出来ました。今その毎週の30分は情報伝達活動の時間になっています。

現在までに工場訪問を12社30回行いましたが、チリの工場における生産性への関心の高さ、管理手法の知識の多さには驚かされます。しかし知識だけで安全対策のレベルは低いので、日本の災害統計を示し、日本で改善を進めた私の体験を語りながら、安全性を高めていこうと話しています。ところが、チリには生産や安全管理を職業とする多くのコンサルタントがいて、短期的改善としては元に戻る繰り返しが多く、改善活動が根付いていません。企業人は改善そのものが自分たちの仕事ではないと認識しているようです。それで、改善サイクルを自主的に回すような組織を作るために、5S（整理・整頓…）から始めて、問題解決やTPM（自主保全等）に少しずつ活動の幅を広げています。更に現場的な日本の安全文化として、ラジオ体操と指差呼称、安全パトロールも紹介し、チリのコンサルタントとも協力しながら日々試行錯誤しつつ、文化的な壁を少しずつ押し動かしているというのが実感です。残り約半年間、今後の展開のための技術資料をまとめ、なんとか安全を中心とした改善成果につなげていきたいと思います。





メキシコ

私の任地 メキシコシティ 第6工業高等学校

黒須 英典

職種：適正製造基準 2012年3月～派遣中

私の配属先はメキシコシティ南東にある第6工業高校（Cetis 6）で、1969年にドイツの援助を受けて開校しました。授業は午前の部（7:00-14:00）と午後の部（14:00-21:00）の2部制で、生徒数1100名、教師110名。プラスチック、機械、電気の3学科があり、入学は無試験、3年間で必要単位を取得し、バッチレートの資格を得て卒業します。学校が抱える問題は卒業率や進学率の低さで、そのために教育方法の改善や教師の能力向上が要求され、“質の良い中堅技術者の育成のための教師の能力向上”の要請に基づき、何が必要かを検討して、小集団グループを編成し、5Sの実施を含め、品質管理系の指導をしています。

任地のメキシコシティは人口約2000万人、メキシコ最大の高原都市で、標高2250mの外輪山に囲まれた盆地にあります。ここは湖だったところを、13世紀末にアステカ人が中心部を埋め立てアステカ帝国の首都を築いたのですが、1519年にスペインがメキシコ征服で破壊し、大規模な埋め立てを行って現在のメキシコシティが出来ました。当時の建物の中には地盤沈下で傾いているものが多くあります。

常夏の国のイメージで着任したのですが、1年中何かしらの花が咲いているものの、朝晩は年間を通じて肌寒く、長袖が欠かせません。1～2月は朝晩5℃程度まで下がり、1日で四季を感じる日もあります。暖房装置がある施設は見た事がなく、朝晩の寒さは堪えますが、昼間は暖かくなり、結構住みやすい場所と思えます。

こちらの天気はころころ変わります。雨季には突然大雨になり、1時間ほどで晴れ、この状態をあるメキシコ人は「メキシコ人の気持ちと同じ」と言っていました。

市内には歴史的建造物が多く、観光ツアーの料金は高いですが、地下鉄とメトロバス（市内路線バス）を利用すると、安く、安全に気軽に足を伸ばす事ができます。地下鉄は全線一律5ペソ（約35円）、メトロバスは一律6ペソです。初めは利用が難しいかも知れませんが、東西南北に走る路線で、行先に最終駅が表示さ

れており、これさえ理解されれば安心して利用できる地下鉄です。

後部席の窓に顔写真を貼り、安全を強調しているタクシーを見かけます。写真と本人の顔が違うので聞くと、10年前の写真だと答えたりします。いろいろな事件が発生しているので、タクシーには気をつける必要があります。

メキシコに赴任して以来、いろいろな異文化に接してきました。異文化を知ることには楽しいものと思っていましたが、腹がたつ事もたびたびあります。

メキシコでは個人主義が徹底しており、さしずめ「赤信号、一人で渡っても怖くない」という感じです。例えば、時間を守らない、約束を無視する等ですが、接する多くのメキシコ人はこれらに直面しても当然として受け止めて怒りません。何か用事が発生した場合に、条件反射的にアオリータ（直ぐに）とかシンコ ミストス（5分）と言いますが、これらの表現には1時間以上の待ち時間が含まれている事が後でわかりました。

銀行の前で長蛇の列をなして順番を待っている人を多くみかけます。1時間以上待つ事も多く、皆さん何事もないように待っていますが、ちょっと耐えきれない場面です。学校では、事前の連絡なしに、当日の朝になって、今日は休みですとか、催しがあるとか聞くことがたびたびあります。私はカリカリしますが、先生達は何も言いません。個人の祝い事等があると、大音響で音楽を流しています。私には騒音ですが、音楽は皆で楽しむものらしく、誰も注意しません。

習慣の違いでは、飲むお湯は鍋で沸かしてひしゃくでくみ取り、コップに注ぎます。ヤカンも売ってはいますが、皆さん鍋でお湯を沸かします。売店の甘いコーヒーは鍋で煮詰めてあり、ひしゃくでくみ取ってコップに入れますが、さすがにそれを見た瞬間ぎょっとしました。学校の先生は朝食を食べないで学校に来て、10時から11時までに朝食をとる習慣だそうです。

こちらでの観光の際は治安には十分注意が必要です。メキシコシティには地方から職を求めて出てきた人たち等300万人弱がスラムで暮らしており、所得の低さと犯罪率は比例していると言われています。身近の事例として、ナップザックを背負った状態で中から現金やパスポート等を盗まれたケースがあり、背負う場合は鍵がかかるものが便利です。

現在、私は日常生活の中で異文化に憤慨したり、時には楽しみ、若干ストレスを感じながら元気にSV活動を頑張っています。

では皆さんご機嫌よう！



会 員 随 想

会員の近況や思う事を寄稿してもらいました

私と南米とサッカー

村田 淑子

任国： パラグアイ 2009年6月～11年6月

パラグアイの知人から、秋真っ盛りでラパーチョの花が満開と言うメールを頂いた。濃いピンクや白、黄色の花を思い出すと共に南米ですっかりサッカーファンになった頃のことを懐かしく思い出した。4年に一度のワールドカップも、今年はあっけなく日本が敗れてしまったので意気が上らず、あんなに南米で燃えていた自分が不思議な気さえる。

最初にブラジルに赴任したのは前々回のドイツ大会直前だったが、飛行機の搭乗日が予定より一日遅くなると言う連絡がJICAより入った。私たちのサンパウロ到着と、ブラジル選手団の出発が同日になるので空港の安全が保障できないと言う理由だった。私は運動音痴で、それまでサッカーにあまり興味がなかった。暮らしてみると南米の人はみんなサッカー大好き。路地でも小さな広場でも、いつでもどんな所でもボールを蹴っている。日本語学校でも子どもたちは休み時間になるとボールを持って外に飛び出していった。

2回目のパラグアイ赴任中に南アフリカ大会があった。休暇でシニア仲間と行ったイースターで、ワールドカップ出場国全てを回ると言う企画を立てて世界中を回っていた日本人の青年二人と知り合った。後日彼らがアスンシオンにやって来たときに、宿を提供したのが始まりだった。私の住んでいたアパートに日本の元サッカー選手が来たことを彼らから知った。元日本の大リーガーのゴールキーパーで、パラグアイのスポルティボルケーニョに入団した小澤選手だ。真面目で礼儀正しい好青年に私はたちまちファンとなり、それから隣のルケ市まで試合があるとみんなで応援に行ったものだ。日本人サポーター達が集団で毎週応援に来ると地元のマスコミで評判に

なったほどだった。彼は今日本に戻って、子どもたちのためにNPO法人を立ちあげて頑張っているが、その時の仲間とは今でも良い付き合いをしている。

南アフリカ大会では日本とパラグアイの対決があった。パラグアイでもサッカーは国民的スポーツである。日本のマスコミが日本語学校に来て生徒たちに「どちらを応援するの」と聞いた。「もちろん両方応援するよ」と子どもたちは答えてはいたが、ルーツは日本人でも子どもたちの祖国はパラグアイ。なんて酷な事を聞くのだろう。PK戦で日本は敗れたけれど、結果的にはそれでよかったと私はその時思った。

パラグアイには現在約7000人の日系人が暮らしている。日本で暮らしてきた私たちが想像もできないような、過酷な体験をして来られた人達ばかりだ。元シニア海外ボランティアの仙道富士郎氏がその方々に3年前インタビューをされた。その記録を本にまとめようという話があり、私も少しだけがお手伝いをさせて頂いた。

『遙かなる地球の裏側に夢を馳せた人々』

それが今秋やっと本の形になる。是非一度手にとって読んで頂ければと願っている。



英語塾と私

品川 洋之助

任国： パラグアイ 2000年10月～02年10月



2011年5月、鎌ケ谷市立南部小学校登下校安全パトロールを始めました。これは同校支援ボランティア活動の一環で児童の通学路をパトロールします。丁度

6月本SV会の会長を辞し顧問になった時です。以来児童の交通事故、不審者・誘拐事件等の新聞報道があり、近隣町内会安全パトロール隊が児童の見守りに合流するなどの進展がありまし

た。

児童の親より、ボランティアとして英会話スクールをやって欲しいとの打診があり、そこで相談の上「利用規約」、会の名称Kid's English Club（代表：崎間チエリ）などを決め、小生が英語講師に委嘱され、昨年9月英会話塾の発足となり授業を開始しました。現在、生徒は2年生から6年生まで11名、原則毎土曜日午前中1時間の授業です。教材は日米の幼児向けDVD、旺文社の音声が出るペン付絵本などを活用しています。

本年、鎌ケ谷市第二多文化推進計画策定委員に応募し委嘱されました。7月に第1回委員会が開催され中国籍の公募委員1人を含む6委員で討議を行いました。

今後とも、自らの海外経験を生かして地域社会に役立つボランティア活動を楽しく続け、それが「少子高齢化」「子育て支援」などに多少役立つと考えています。

(2014/08/10)

JICAボランティア千葉県庁表敬訪問

3月17日（月）午後、青年海外協力隊事務局の三次啓都次長の引率で、平成25年度第4次隊の青年海外協力隊（JOCV）6名と、シニア海外ボランティア（SV）葛山文治氏、上垣英三氏、渡辺 章氏（弊社会員）の方々が千葉県庁を赴任前の表敬訪問をされ、千葉県総合企画部 鶴巻郁夫部長から激励の言葉を受けられました。また、23年度3次隊の帰国したSV4名も表敬に合流し、慰労の言葉を頂きました。

6月25日（月）午後、JICA東京国際センター人事開発・経済基盤開発・環境担当の宮坂 実次長の引率で、26年度第1次隊のJOCV21名と、SV 江田隆正氏（グアテマラ 廃棄物処理）、渡邊 茂氏（フィジー 廃棄物処理）、長田美恵子氏（ブラジル 日系日本語学校教師）、竹内博史氏（フィリピン 品質管理）の4名の方々が千葉県庁

を赴任前の表敬訪問をされました。千葉県 諸橋省明副知事から激励のご挨拶があり、派遣ボランティアを代表して、江田隆正氏がその抱負を述べられました。また、23年度4次隊の帰国したJOCV10名とSV2名も表敬に合流し、慰労の言葉を頂きました。



JOCVとSVの皆さん（中央 諸橋副知事）

JICAボランティア秋募集説明会

JICAシニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊の秋募集説明会が右記のとおり開催されます。

会場ではパネリストによる体験発表や、よろず相談があります。両日ともにシニア海外ボランティア、青年海外協力隊を合同で行います。申し込みは不要で、会場に直接お越し下さい。

- － 10月14日（火曜日）19時～21時
船橋会場：船橋フェイスビル6階 きららホール
（JR船橋南口、京成・東武各線船橋駅 徒歩1分）
- － 10月25日（土曜日）14時～16時
千葉会場：バーディーホテル千葉 2階会議室
（JR千葉駅西口 徒歩1分）

JICA千葉デスク便り



日本で地域に根付いた活動を！

今年2月よりJICA千葉デスクに着任しました和泉澤 浩です。

私は平成23年度2次隊として、マラウイへ青少年活動の職種で派遣され、10～29歳までの若者に対し、スポーツ、レクリエーション、職業

訓練、イベント企画などの指導を行っていました。

マラウイでの活動を通して、地域に根付いた活動の楽しさ、難しさ、やりがいを感じ、帰国した今、出身地の千葉県で地域に根付いた活動を行いたいと考え、現職に就きました。

千葉県JICAシニアボランティアの会の皆様には、以前より出前講座をはじめとする様々な活動にご協力いただいています。私は市民の皆さんが主体の国際協力イベントを実施し、千葉県を国際協力で盛り上げていきたいと考えています。
（和泉澤 浩）

編集後記

山本義隆の近著「世界の見方の転換」によれば、16世紀の欧州で地動説が突然現出したわけではなく、それに至る宗教上の葛藤や宇宙の理解に対する試行錯誤的な結果としてそれが現われた。コペルニクスは当時の宇宙論考者のひとりである。われわれが「コペルニクスの転回」と言う場合、ものの見方や世界観を正反対にかえ、主客を転倒し、立場を交代させ、ついに関与する哲学の本質さえも変える状態をさす。コペルニクスを過度に賞賛しすぎる意味合いではないかとの疑問も生ずるほどだ。

当会の機関紙「SVニュース」は本号からコペルニクスの転回をとげて、従来の縦組み右開きから横組み左開きとなった。さらにフォントやデザインも変更して読みやすくなるよう「転回」した。こうした転回が単に表面的な見かけの変更に終わることなく、その内容の充実には今後、一層の配慮を図りたい。当「SVニュース」を時代に即応する柔軟な体裁や内容のものに「転回」させることは、「SVニュース」が社会に対して何らかの寄与をすることを期待する場合の前提条件というものともなろう。今後とも、会員諸氏にはこうした側面でのご指摘やご指導を賜りたい。

（大西 輝明）

行事予定

当会参加予定の行事です（確定分）。奮ってご参加ください。

- － 浦安市国際協力フェスティバル 2014
平成26年9月20日（土） 新浦安駅前
- － 2014 かしわ de 国際交流フェスタ
平成26年9月21日（日） 柏駅前
- － 国際フェスタ千葉
平成26年10月5日（日） 麗澤大学
- － 成田市国際市民フェスティバル 2014
平成26年10月5日（日） 成田国際文化会館
- － 生涯学習ボランティアフェア 2014
平成26年11月21日～30日 千葉市生涯学習センター
- － 第19回公開講演会
平成26年11月29日（土） 千葉市国際交流プラザ
- － 第12回定例会
平成26年11月29日（土） 千葉市国際交流プラザ
- － ちば市国際ふれあいフェスティバル
平成27年2月8日（日） 千葉市 きぼーる
- － 第18回帰国報告会
平成27年2月21日（土） 柏市 アミューズ柏